

夏目漱石『こころ』とポール・ブールジェ『弟子』 を比較して：唯物論的決定論との対比の視点で

毛利，郁子
九州大学大学院比較社会文化学府：修士課程

<https://doi.org/10.15017/1551319>

出版情報：九大日文．25，pp.23-35，2015-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

夏目漱石『こころ』とポール・ブールジェ『弟子』を比較して

——唯物論的決定論との対比の視点で——

M O T O H I Z I
毛利 郁子

一、はじめに

本稿は一九四〇年二月第四七号日仏交流誌 *France-Japon*⁽¹⁾に掲載された Pascal Laut (パスカル・ロー)「L'orsqu'un Français lit "Kokoro"」(フランス人が『こころ』を読んだとき——引用者訳)をもとに考察した。彼は漱石が『こころ』に「西欧の芸術」(une art occidental)を適用しているという。そして特にポール・ブールジェ (Paul Bouget 1828-1892) の『弟子』⁽²⁾と『現代心理論集』⁽³⁾の影響を指摘する。その根拠のひとつとして、自然主義者との対比を挙げている。パスカル・ローは五頁ほどの短い論文の中で影響の具体的な分析はしないが、その対比は明確に述べている。そしてその自然主義者との対比は、特に『弟子』との比較においてより明らかになると思われる。それゆえここでは『弟子』の影響を考察する。『現代心理論集』に関してはまた異なる比較が有効だと思われるので、ここでは取り扱わないことにする。実際漱石旧蔵書にも『弟子』の英訳版があり、漱石が読んだことは確

実であるということもある。

『弟子』は、一八八九年に刊行され、十九世紀フランス自然主義に対して問題を投げかけ、モラルを再考させ、フランス文学史にくつきりと一線を引いたとされる問題の書である。フランス自然主義の理論的支柱はテーヌ (Hippolyte Adolphe Taine 1828-1892) とルナン (Joseph Ernest Renan 1823-1892) であった。特にテーヌの理論、唯物論的決定論に挑戦したのである。パスカル・ローは日本でも自然主義が全盛であったころ刊行されたのが『こころ』であり、それゆえ『弟子』と同じ意味を持つていたと考えたのである。

Kokoro parut en 1914; le naturalisme triomphait encore au Japon. L'auteur n'avait pas atteint cette manière. (『こころ』 45-1
九四一年に発刊された。その頃自然主義がまだ日本では勝利していた。

漱石はその方法はとらなかつた) (Pascal Laut 「L'orsqu'un Français lit "Kokoro"」 *France-Japon* 47, 1940, p231) (拙訳以下英文共)

そして『弟子』の『こころ』への影響を唯物論的決定論との関係で捉えた場合、『弟子』と『こころ』の類似点は人間のこころの不可知とモラルであると考え、この二点についてそれぞれの作品にどう表現されているかを考察する。

また二つの作品の違いについてもローは明確に述べている。

Naturalisme est sobre de théories. S'il a lu Bouget, il ne lui a pas

pris son dogmatisme. Point de préface à la mode de ceil du *Disciple!* Point de grandes theories. Point de morale. Il a réalisé son roman d'analyse en grand artiste qui laisse simplement parler les faits et agir ses héros. (夏目は控えめな理論家だ。もしブルジェを読んでいたとしても、独断的なやり方はしないだろう。『弟子』の序文風の序文はない。大げさな理論も、モラルもない。彼は偉大な芸術家として単に事実を語らせ、主人公を行動させ、その分析小説を実現した。) (Pascal Laut [Lorsqu'un Français lit "Kokoro"] 前掲 p234)

これは書き方の相違の指摘であると思われる。それゆえこのことに関しては二つの類似点の考察の後、再考する。

二、不可知について

①『弟子』における不可知

師アドリアン・シクストの唯物論的決定論に心酔するロペール・グレルーは、貴族の娘シャルロット・ド・ジュッサを計画的に誘惑して、あたかも科学の実験をするように恋愛心理の実験を試みる。作中でシクストの著作とされる *La Theorie de passions* 『情欲論』をもとにシャルロットを自分に恋させようとする。

まず師アドリアン・シクストの唯物論的決定論の理論とは何かが明らかにされる。

第一の特質はハーバート・スペンサーが「不可知」と呼ぶところのものを、否定的に分析するところに存する。ブルジェ『弟子・上』内藤灌訳、岩波書店、一九四一年七月（三九頁）である。さらに第二の理論である。

不可知なものは形而上学的幻想だというのがシクストの理論である。さらに第二の理論である。心理学者として彼の名を高うした第二の理由は、人間の感性の動物的起源について頗る新しいしかも頗る巧妙な説明を行ったところにあつた。自然科学に関する書籍を大いに読んで、微に入り細を穿った知識を蓄えていた彼は、ダーウィンが生活形式の素因に対して試みた労作を思想の形式の素因に対して試みることができた。人間の心を構成するさまざまな事実に進化の法則を当てはめて、われ々の最も上品な感覚も、また最も微妙な精神上の敏感さも、われわれの最も恥づべき人格の失墜と同じに、頗る単純な本能の最後の帰結でなければ最終の変態であり、単純な本能そのものがすでに原始細胞に固有な性質の変形であると言ふところに彼の主張があつた。したがって、精神の世界は物質の世界さながらの再現であり、前者は後者の苦痛なり忘我なりの意識に過ぎないことになるのである。(ブルジェ『弟子・上』前掲 四〇頁)

この理論には進化論が関わっている。進化論の出現はヨーロッパ

ツパの人々にとつては驚異的なことであつた。キリスト教の影響が強く、神が人間を作つたと信じられていたが、進化論によつて神の存在が否定されるからである。われわれの精神も進化の果てに作られた脳という器官の働きによるものなのである。デカルトは「自我」という非物質的な不滅のものの存在を肯定したが、テーヌはそれを否定しなければカメラのような「人間機械」(the human machine)⁽⁴⁾の働きによつて精神的事実なども捉えられるとする。『現代心理論集』の翻訳者平岡昇は次のようにいう。

テーヌは連想学派に入る。連想主義はデカルト、スピノザ、ライブニッツらの大陸合理論 (rationalism) に対するイギリス経験主義 (empirism) の系統に入る。ホッブス、ロック、ヒュームが感覚と感覚から生ずる観念とを要素とし、その連合によつて複雑な心のメカニズムを説明し連想主義の基礎を築いた。この学説は感覚あるいは観念を、外界の事物が感覚器官に作用することによつて生ずる大脳中の振動に対応させたハートレーにより生理学的説明が加えられ、心理学的体系に発展し十九世紀中葉に至り、連想心理学としてミル父子、バインによつて完成された。ハーバート・スペンサーは、ダーウィンの進化論をとりいれ、これを進化論的連想心理学に拡大した。(ポール・ブルジェ『現代心理論集』平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版局、一九八七年十二月 三四九頁)

テーヌは外的事象と同じく精神的事実も観察と分析によつて科学的に認識できるとした。人の意識の根本はイメージ (images 心像) である。自我はデカルトのいう非物質的なものと違つて、イメージの連合の仕方にも他ならない。この連合の仕方とは人それぞれ異なり、考え方、感じ方、欲望の仕方となる。それは人種、環境、時代によつて決定される。そしてこの精神的実実は、外的事象と同様、客観的な探求によつて、すなわち意義ある小事実を収集、分類、解釈、分析することで認識可能になる。人間の心も観察によつて知りうることができる。眼に見えない内的人間も眼に見える外的人間(家、服装、趣味、行動など)の観察によつて知ることができる。それゆえ不可知なものはないのである。

そのような理論をもつシクストは、弟子として数回会いに来ていたロベール・グレルーが令嬢殺しの罪で逮捕されたと聞く。そこへ牢獄に捉えられたグレルーから長い手紙が届く。手紙には自分の出自、父母から受けた影響、思想、事件の経緯などが詳しく書かれていた。彼が父や学校教師、近代文学の影響から宗教に対して疑念をもち、無宗教になり、アドリアン・シクストに傾倒していく様子が細かく描かれる。その後ジュッサ家の次男の家庭教師となる。そしてその姉のシャルロットを誘惑しようと思ひ立つ。シクストの『情欲論』の科学的実験の記録がないので、自分が行い学問に貢献しようと思つたからでもあつた。しかし、本当のところグレルーはまったく理屈なくシャルロットを想つたのだつた。世間なみに恋をしたのだ。しか

しそれを自覚せず、グレルーは次のようなシクストの『情欲論』に従って実験に着手する。

第一の原理は、大部分の人間は、ただ模倣によつてのみ感情をもつている、その本来の単なる姿をそのままにして置いたら、たとへば恋愛のごとき、かれら大部分の人間にとつては、動物の場合と同じく、満たされるなり直ぐに消え去る性的本能に過ぎない、といふのです。(プールジェ『弟子・下』前掲 二二頁)

第二の原理はと申せば、嫉妬は恋愛に先だつてたしかに存在しうるものである。従つて、嫉妬は屢々恋愛の後に於いて残存しうるのと同様、時としては恋愛を発生させることがある、といふのです。(プールジェ『弟子・下』前掲 二二頁)

グレルーは第一の理論「模倣によつてのみ恋愛のような感情をもつのだ」に従つて、シャルロットに恋愛小説を読ませ(模倣)、恋心を起こさせようとする。『ユーージェニー・グランデ』、『ドミニック』、『クレープの奥方』、『谷間の百合』などを讀ませる。第二の理論に従つて、嫉妬をさせるようにする。自分には両想いの娘がいたが、彼女は金持ちの男の方に行つてしまつたとグレルーの気持ちがあると思わせる。そして同情心、嫉妬心を煽り、恋心を作り出そうとする。その結果シャルロットは内心ではグレルーの策略どおり恋に陥るが、グレルーは観

察からはそれを読み切れない。グレルーは一度はシャルロットの気持ちをつかんだかに思えたが、シャルロットは混乱し、逃げ出しパリで婚約する。意地になつたグレルーはシャルロットを誘き寄せ十二時までに来なかつたら自殺すると脅す。驚いたシャルロットは恋を告白し、二人が一緒に死ぬという特別な条件で身を任せる。朝になりグレルーは死ぬことが怖くなり、死なずとも、シャルロットを手に入れられると心変わりし、自殺しないで一緒に生きたいという。騙されたと思つたシャルロットはグレルーと別れた後、毒を飲んで自殺し、グレルーも状況から殺人の罪を負わせられ投獄されてしまう。

このように『弟子』では、決定論の理論の実験をしたが、シャルロットの気持ちを理解しきれず自殺させてしまうロベール・グレルーの姿が描かれる。シャルロットの自殺によつて後悔するグレルーはシャルロットのこころを理解しきれなかつた。人間のこころは観察によつては知ることはできないのではないか。この世に不可知なものはないはずであつたのに、シャルロットのこころは不可知であつたのだ。

②『こころ』における不可知

『こころ』にも不可知が描かれている。私(先生——以下本稿において私はすべて先生)はKが恋をするなどと思つてもいなくなつた。Kのことはよく知つていたはずだ。そのKが私の目の前で全く今までと違つた姿で恋を告白している。この事は全く予期せぬ出来事だつた。まずKのこころを理解していなかつた。道

のためならずすべてを犠牲にするという強い主張を持ち、意志も強かったKが、他人の迷惑など気にしなかったKが、自分の意見を聞きに来て、弱い人間であるのが実際恥ずかしいとまでいう。そのようなKの姿は予想さえしなかった。Kのころは不可知だった。

次の不可知はKの「覚悟」の意味である。私はKの告白以来、Kを恋のライバルとしてみなすようになり、他流試合、要塞の地図と戦いの比喻まで用いて表現されるように、急に利己的になる。私は「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」といつて、彼の恋をあきらめさせようとする。その言葉はKに自分の過去、自分の主張を思い出させ、自分の陥った恋がいかに自分の主張と異なっているかを実感させるものだった。Kには実に痛い言葉だった。それも恋に陥り、眼の眩んだ私には読み取れない。私はさらに平生の主張をどうするつもりなのかと追いつめる。Kは「覚悟——覚悟ならないこともない」という。そしてまた私はこの「覚悟の意味を考えに考えていると、最初は「Kが恋をあきらめる」と解釈していたが、「Kが恋のほうに突つ走る」と思い、お嬢さんとの結婚を急ぐことになる。この「覚悟」は自殺の意味だったかも知れない。相手のころのすべてを知っていると思っていたのに、恋に目がくらんだ私は自分のことしか考えられなくなり相手のころがわからない。

次の不可知はKの自殺である。Kはお祝いを言いつつその夜自殺してしまう。遺書はあったが、自殺の原因もはっきりしない。この自殺も予期せぬ出来事である。シャルロットのころ

をわからなかったグレルーがシャルロットの自殺を予期できなかったように。

また自分のことさえ不可知である。Kを追い詰めた自分のころは普段の自分ではなかったと後に気がつくのである。恋に目がくらんだ私は普通であれば決してしなかったような残酷なことをいつてしまう。また仮病をつかい、結婚の約束をとりつけるなど卑怯な行動もしてしまう。いざというときにはいくらでも悪人に変わることができるということを思い知るのは、Kがお祝いを言つて自分には何もあげるものがないといった時であった。自分のころさえも不可知である。

そしてKからすれば、私は不可知である。誰に頼ることもできなかつた自分を、それまで温かく、親切に扱つてくれ、信用して告白した私は急に予想外の行動をする。ある日病気になるので学校を休むという予期せぬことが起こつた後、なんとその親友がお嬢さんと結婚するというのだ。これもKにとっては予期せぬ出来事、行動であつたらう。

また私はお嬢さんの気持ちも不可知である。歌留多取りの場面などではKに気があるようでもあり、あるときは私に気があるようでもある。お嬢さんにしてみれば私の気持ちも不可知である。このように三人の登場人物それぞれが相手の気持ちを分かつた行動し、悲劇的な結末をもたらしてしまう。『このころ』がこの不可知を描いているということは、次の表現をもって確証されるのではないか。

さうした心の経過には、潮の満引と同じように、色々の高低があつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加へました。奥さんとお嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたして其所にあらわれている通なのだらうかと疑つてもみました。さうして人間の胸の中に装置された複雑な器械(傍点—引用者。仏訳『ころ』⁵⁶では *cette machine compliquée*)が、時計の針のように明瞭に偽りなく、盤上の数字を指し得るものだらうかと考へました。要するに私は同じ事を斯うも取り彼あも取りした揚句、漸く此処に落ち付いたものと思つて下さい。更に六づかしく云えは、落ち付くなどといふ言葉は、此際決して使はれた義理でなかつたのかも知れません。(夏目漱石「心」『漱石全集』第六巻、岩波書店 一九六一年 五月 二四四頁)

この「器械」という語はテーヌの「人間機械」を意識しているのではなからうか。人間機械に現れるイマージュが意識をつくる。それは観察によつてもたらされた。内的人間もさまざまなものを観察することによつて知りうるとテーヌは『英国文学史』で主張する。私はKを一生懸命観察しているが、私が観察したとおりでいいのか。Kのこの「イマージュ」は私が推測したとおりでいいのかと。Kの外面に表れたところから推測しているが、私が推測し、思っている「イマージュ」とは違った「イマージュ」がKのところに輻射しているのではないか。奥さん(母)とお嬢さん(娘)も言動から推測したと

おりのイマージュをもっているのか。本当にテーヌが言つたとおりか。そう簡単に人の心は分からないのではないか。さまざまに観察し推測するがわからない。このように『ころ』には不可知の世界がひろがつている。

漱石旧蔵書にはテーヌの『英国文学史』が二冊あり、テーヌのいう「人間機械」の意味も十分知っていたことは確かである。そして『弟子』以上に人物と人物同士がぶつかりあい、相手の気持ちを理解しようとして、理解できない心理の表現は見事としか言いようがない。「絶えざる内省 (*introspection constante*)、心理的小事実の關係 (*la relation des petits faits psychologiques*)、感情の描写 (*la peinture des sentimens*)、そこに情熱的な夏目がいる」とローは書いている。

三、モラル

①『弟子』のモラル

シャルロットが自殺し、グレルーは状況から殺人の嫌疑をかけられ牢獄に囚われる。グレルーは悔恨の情にとらわれている。自分が悪かったと。しかし自分は決定論に従つて実験をした、たけなのである。グレルーは、師アドリアン・シクストに手紙を書く。

どんなに厭ふべき、どんなに悲しむべき行為でも、あの熱情なくして人を誘惑する企てでも、死ぬ約束を果たし得な

かつた私の弱さでも、宏大無辺な宇宙の法則全体とおのづから関係があるという確信、普遍的必然性に対する私のこの確信に向かつて力をお与へ下さい。お前は人非人ではないと。(フールジエ『弟子・下』前掲 一四三頁)

自分は悪人ではないと確信がほしかった。なぜなら決定論の理論では悪人はいないからだ。シクストの理論は次のようであった。

然し哲学者にとつては、犯罪といふものも徳行といふものも存在しません。我々の意志によつて生ずる行為なるものは、若干の法則によつて支配されるある種の出来事に過ぎません。(フールジエ『弟子・上』前掲 六八頁)

これもまたテーヌの理論と関係している。テーヌは『英国文学史』の「緒論」Ⅲで次のように記している。

消化作用・筋肉運動・体温に原因があると同様に、野心、勇気・真実性にも原因がある。悪徳や美德も、硫酸や砂糖のやうに生成物だ。(テーヌ『英国文学史・第一巻』平岡昇訳、岩波書店、一九五三年 一月 一七頁)

これはどのようなことだろうか。漱石の英国留学時のノートに説明がある。

V 1—2 2 Genius

道徳ヲ論ズル者ノ中ニ determinist ナル者アリ曰ク吾人ノ行為ハ character and circumstance ノ antecedents ノ為ニ determine セラルル皆 causation ノ law ノ為 govern セラルル故ニ choice ノ freedom ヲ有セズモシ此說ヲ真トスレバ吾人ノナルシタル善行悪為ニ責任ナキ者ナリ従ツテ凡テノ賞罰ハ応報(其人ニ対スル)ニアラズシテ其人ノ未来ノ行為ニ対スル奨励モシクハ懲戒ノ具ニ過ギズ即チ過去ニ対スルノ酬ニアラズシテ未来ニ対スルノ策ニ過ギズ(道徳を論じる者の中に決定論者であるものがある。その者がいうには、我や人の行為は性格と環境が先行するため決定せられている。因果の法則のために支配せられている。ゆえに選択の自由を持っていない。もしこの説を真とするなら、われらは人にした善悪の行為に責任がないのである。従つてすべての賞罰はその人に対してなされるのではなく、その人の未来の行為に対する奨励や懲戒にすぎない。——引用者訳(夏目漱石「英国留学時ノート」『漱石全集』第二巻 岩波書店、一九九七年六月六九三頁)

また漱石は「作家の態度」のなかで説明している。

真のみをあとづけ様とする文学に在つては、人間の自由意志を否定して居ります。たとへばこゝに甲があつて、ある憤りの結果乙を殺す。罪を恐れて逃げる。後悔して自殺する。と仮定すると、憤りが原因で人を殺して、人を殺した

のが原因で、罪を恐れる様になつて、それが又原因になつて、後悔して、後悔の結果遂に自殺した事になりますから、かくの如く層々発展してくる因果の連綿は皆自然法則によつて出来たものと見なさなければなりません。殺すのも、恐れるのも、悔ゆるのも自殺するのも、決して当人が勝手にやつたわけではない。殺してみると、厭でも応でも恐れなくちや居られなくなり、恐れると、どんなに避けようとしても悔恨の念が生じ、悔恨の念は是非自殺させなければ已まない様に逼つて来る。(中略)人殺しをした本人を責める訳にも自殺をした本人を褒める訳にも参らなくなりませぬ。若し責めるなら自然を責めなくつてはなりません。(夏目漱石『創作家の態度』『漱石全集』第十六卷、岩波書店、一九六一年

十月 一六五—一六七頁)

決定論では環境や性格が原因となつて犯罪は起こるのであり、本人には責任がないのである。グレルーはこのような師の教えを信じていた。どんなに悪いことをしても、それは環境や生まれつきの性格からそうしたのであって悪人はいない。それは宇宙の法則からそうだったので、それなのにシャルロットが自殺し、自分が悪かつたと思わざるを得ない。正しいと思つていた理論は間違ひではないかと思う。それを師に問ひただしただしい。アドリアン・シクストは答えに窮する。またシクストはグレルーが法律的には責任がないことを知つてゐる。シャルロットは自分で自分の人生を決めた。直接殺したのではない。むしろグレルーは自殺を止めたのだ。そのことを知つてゐるのはシャルロットの兄のアンドレ伯爵とシクストしかない。しかし、グレルーはシャルロットの名譽を守るため、黙つてこのまま絞首刑になるつもりだ。シクストはグレルーを助けに行かなければならない。しかし彼は自分の理論が間違つていたのかどうかにも悩んでゐる。そんなときアンドレ伯爵は裁判でグレルーが殺してゐないことを明かし、牢から出すが、グレルーをピストルで射殺する。死体になつたグレルーを見てシクストは神に祈るしかなかつた。

ここでは師の責任問題が出現し、モラル問題が大きく取り扱われている。決定論のモラルについての理論は正しいのか、間違つてゐるのではないかと、シクストの責任を厳しく問うのである。決定論のモラルを信じ誤つた人生を送つてゐる若者が現代のフランスには多いのではないか。理論には責任があるのではないかと作家の責任という問題が議論された。その後アナートル・フランスとフェルディナンド・ブリュンティエールの論争^⑥を引き起こした。

②『こころ』のモラル

『こころ』ではモラル問題は議論されない。だが私はKの自殺の後、ずっと罪の意識に悩まされ、毎月墓に詣で、お嬢さんと結婚した後も、仕事に就くこともなく、酒におぼれたり、読書に没頭したりしても、Kへの罪を忘れることができなかった。またKの死の原因を繰り返し繰り返し考える。そして自分も叔

父と同じく非倫理的な人間だと思ひ愕然とする。さらに「人間の罪というものを感じました。」と深い罪の意識を感じるのである。そしてとうとう自殺という結論に至った。

パスカル・ローは「漱石はひかえめな理論家であり、『つる』には大げさな理論やモラルはない。彼はその分析小説を単に事実を語らせ、主人公を行動させて完成させた。」という。モラルの問題として取り扱われるのではなく、私の行動として、会話として表現される。もちろんモラルは表現されている。理論としてではなく、人物の行為や心理として表現されている。

しかし、結局自殺するなら、決定論の自殺とどこが違うのか。決定論でも自殺する。⁷⁾後悔もする。しかしそれは環境に迫られてである。環境に逆らえずどうしようもなくなり自殺するのである。もちろん環境によって犯罪が起るといふ面も大きい。環境や性格によって人間が決定されるということも無視できないことである。しかし本人に罪はないという考えのもとでは、環境がまた次の悪を導いてくる。それゆえ決定論者は環境を変化させようとする。よい環境ならばよい結果がうまれるからだ。しかしどんなに環境が悪くても必ずしも殺人をするとは限らない。人間には意志があるからだ。

漱石旧蔵書の中の著作テーヌの *NOTES ON ENGLAND* の中でその本の英訳者 F. W. Rae が「INTRODUCTORY CHAPTER」において次のように指摘している。

(略) the book was impious and immoral; that its author had

alleged "virtue and vice to be products like sugar and vitriol" that he had denied the freedom of the will; that he had advocated pure fatalism, had depreciated the ecclesiastics of the Middle Ages, had eulogized the Puritans, had pointedly commended the English Prayer-Book, had shown himself a sceptic in philosophy and a heretic in religion. (この本『英国文学史』——引用者注) は不信心で非道徳である。その作家(テーヌ——引用者注) が主張するのは「悪徳も美德も砂糖や硫酸塩と同じように生成物だ。」ということだ。彼は意志の自由を否定する。彼は純粋な決定論を唱え、中世の聖職者を軽視し、ピューリタンを称賛し、イギリスの祈祷書を辛辣に批評し、彼自身哲学における懐疑論者で宗教における異端者であることを示す。(H. A. Taine (1873), *Notes On England*. Trans. by W. F. Rae. London: Strahan&Co. xviii) ⑧

決定論的な善悪は、人間の自由意志がないことになる。やはり本人が思わずしてしまったことでも悪は悪として意識しなければ、因果の法則に支配され、本能のみに支配され、動物のように生きる、環境に支配された存在になってしまう。たとえ環境がいかなるものでも、それをしない意志は人間ならばあるはずである。私はもつと他の方法も選択することができたはずだ。しかしそれをしてしまった。そうして私は罪の意識を深く感じ苦しんだ。こころの中で苦しみ続けた。なぜそんなに長く苦しまなければならないのか。また「創作家の態度」の中で記されている。

所が情操を本位とする文学になると、好悪があり、評価があるんだから、篇中人物の行為は自由意志で発現されたものと判じてかゝらなければならぬ。右へも行ける。左へも行ける。のに彼は右を捨て、左へ行つた。だから、えらいとなります。感心だとなります。彼自身の意志の働きて、やつた行為であればこそ、其行為者に全部の責任を負わせることが出来、出来るから其責任者たる当人が責められる資格もあり又褒められる資格もあるのであります。もし自分がやつたんぢやない、因果の法則がしてかしたのだと、高を括つて居たらば、行為其ものに善悪其他の属性を認め得るにしても、行為を敢えてしたる本人には罪も徳もない訳になります。(夏目漱石『創作家の態度』『漱石全集』前掲 一六六頁)

情操文学では、どのような行為も自分の意志でしたことだから本人の責任になるのである。私も恋のためとして云い逃れることもできたろう。誰か知っているわけでもない。しかし私がKを追い詰めた行動や発言は誰から言われたのでもなく自分でしたことであり、また眼の前で血を流し死んでいったKに対してなにも感じないではいられなかった。「私は人間の罪というものを深く感じたのです。」と長い間ずっと苦しみ続けてきた。そこに決定論との違いがあるだろう。なぜ大したことではない罪で悩み続け、自殺までしなければならないのかという問いもある。しかし悩み続けるといふことに意味があるのである。

考えに考えた末に出した結論である。先生は誰にも知られていないが、自分の心のなかで、深く悩み罪の意識をもつ。意志を持った存在だからである。精神は環境などに左右されない精神独自の働きをもつのだからである。精神はお嬢さんからも奥さんからも観察によつて知りうるものではないのだ。この精神の重要性は『弟子』の序文でも言及されていたことである。漱石旧蔵書のフランス文学史 *French Novelists of To-day* の次の文に漱石の線引きがある。

The preface of *Le Disciple* is an epoch-making production, at once a sermon and the manifesto of a new school. (『弟子』の序文は画期的な作品で同時に説教であり、新しい学派のマニフェストである) (W. Stephens, 1908), *French Novelists of To-day* London: J. Lane, p.151) (5)

新しい学派とは物質よりも意志の自由すなわち精神を重視した学派なのである。それはフランス自然主義の支柱であったテーヌに「私の世代は終わった」と言わせたものであった。(10)

四、相違点について

これまで『弟子』と『ころ』の類似点を考察してきた。観察をもとに内的人間も知りうる和思考する決定論に対して、どんなに観察しても、他人のころ、特に『ころ』では自分のこ

ころさえ知り得ないとしたこと、またモラルは生成物とする決定論に対して、『弟子』では作家の責任と『ころ』では自由意志を持った人間ならば、責任は本人にあるとすることをみえた。そしてどちらも精神の働きの重要性を主張している。

違いは書き方である。『弟子』には序文があり、フランスの青年たちに決定論に支配されない意志の自由を持ってと熱く呼びかける。本文では決定論の理論を実験し失敗する弟子が先生に助けを求めるが、それにモラルの問題に答えきれず神に祈るシクストが描かれる。パスカル・ローはブルジェのやり方を「独断的」だという。理論の正しさを証明するため実験した弟子が失敗し、その理論が正しくないのではないかと問いかける。『弟子』は強引なやり方に思われる。理論の正しさの証明のために小説を作るといふのは自分勝手になってしまうとローは見ている。理論と小説とが一緒になっている。小説によって何らかの思想を表明し、問題を提起する問題小説（*roman à thèse*）⁽¹⁾と言われるもので *French Novelist of To-day* にも記述され、漱石の線引きがされている。ブルジェは思想小説と呼んでもらいたいと言ったという。⁽²⁾その後、様々な理論を主張する思想小説がブルジェ以外の作家によって書かれている。

『ころ』は三部構成になっていて最後の章が私（先生）から「私」（学生）への遺書という形をとっているが、数人の人物が語り、行動してころの不可知とモラルが描かれる。しかも自由意志を持った私（先生）が描かれている。『弟子』では序文で語られた自由意志を持つことの重要性が『ころ』では

自由意志をもった登場人物として、そして『弟子』で問題になったモラルの重要性が『ころ』ではモラルを考えに考える登場人物として描かれるのである。それは理論としては語られないが自然主義を批判したものとパスカル・ローには思われたのではないだろうか。そしてローは『ころ』を小説として価値あるものとする。「grand」という語が五頁ほどの短い論文のなかに五回も用いられている。「偉大な小説」「その成果は偉大だ」「偉大な芸術家」などである。漱石の芸術家としての才能を評価し、それゆえ『ころ』は読者を獲得したのだと述べている。

問題小説としての『弟子』は、自然主義批判をした当時には画期的な書として、一躍有名になり、フランス自然主義を終わらせ、文学史にも残るものだが、時代が変化し問題意識が変化するとともにそれほど顧みられなくなつた。しかし『ころ』はパスカル・ローが言うとおり、小説としての完成度が高いため、読まれ続けているのではないだろうか。

五、おわりに

『弟子』の『ころ』への影響はその他にも考えられる。『弟子』の「序文」における作者（ブルジェ）からフランスの若者への語りかけと、『ころ』における私（先生）から「私」（学生）への遺言とに類似点があると思われる。「師から弟子への語りかけ」という点である。これに関しては『現代心理論集』の影響とともに、別稿する。

ここでは決定論批判という側面で考察してきたが、ブルジョアは、決定論のすべてを批判しているわけではない。田中琢三は記している。

ただしブルジョアは決定論を全否定しているわけではない。この小説で彼が批判したのは、あくまで心理学における決定論や極端な唯物論であり、テーヌが標榜した歴史法則としての「人種、環境、時代」の決定論は、『弟子』以後に明確化していくブルジョアの伝統主義の基盤となるのである。(田中琢三「ブルジョア『弟子』と19世紀末「問題小説」における師弟関係」『お茶の水女子大学人文科学研究』第九卷、二〇一三年三月 三八頁)

前述の *French Novelists of To-day* にもブルジョアはテーヌの方法から出発し、『現代心理論集』や小説の性格などを創作したと記されている。初期はアナトール・フランスとともに進化論を聖書として、決定論者、無神論者であった。だが徐々に思想が変化し、この『弟子』を契機に宗教へと近づき、その後伝統主義、君主制を主張するようになり、フランス革命も否定するまでになった。だが小説にはテーヌの理論も用いている。

漱石も決定論を「自由意志がない」と批判しているが、全否定はしていない。

双方(真のみをあとづける文学と情操を本位とする文学——引用者注)

共大切なものであります。決して一方ばかりあれば他方は文壇から駆逐してよい杯と言われる様な根底の浅いものではありません。(夏目漱石「作家の態度」『漱石全集』前掲 一六七頁)

漱石自身、テーヌの決定論の理論を『ころ』の作中で用いている部分もあるのではないか、と思われる。

パスカル・ローは漱石の『ころ』をフランス心理主義文学の系譜に入るといふ。パスカル・ローは主張する。

Il a traits de la lignée qui va d'Adolphe au Disciple en passant par Dominique.⁽⁴⁾ (彼(漱石——引用者注)は『アドルフ』から『ドミニク』を介して『弟子』路線で論じ(ころ) (Pascal Lant 「Lorsqu'un Français lit "Kokoro"」前掲 p233)

パスカル・ローが指摘する『現代心理論集』は八人のフランス人文学者とツルゲーネフ、アミエルについての評論である。『ころ』を「西欧の芸術」の視点で読んでみることによって、さらに読みを深める可能性があるのではないだろうか。

*作品タイトル、引用文中の旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

【注記】

1 一九三四年十月初版発行、一九四〇年四月終刊。全四九巻、日仏同士会。復刻版全七巻がゆまに書房から二〇一一年十月に刊行されている。

- 2 Paul Bouquet (1889), *Le Disciple*. Lemerc. (ポール・ブルジエ『弟子』内藤濯訳、岩波書店、一九四一年七月)
- 3 Paul Bouquet (1883), *Essais de psychologie contemporaine*. Lemerc. Paul Bouquet. (1885), *Nouveaux Essais de psychologie contemporaine*. Lemerc. 復刻版(1899), *Essais de psychologie contemporaine*. Plon. (ポール・ブルジエ『現代心理論集』平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版、一九八九年十二月)
- 4 イポリート・テーヌ『英国文学史』平岡昇訳、岩波書店、一九四三年一月、三二頁。『英国文学史』の「諸論」は『文学史の方法』瀬沼茂樹訳、岩波書店、一九五三年十月にもある。
- 5 仏訳『ころろ』出版の経緯については、山本亮介「Kokoro(*Le pauvre cœur des hommes*)」(仏訳『ころろ』)出版の周辺——国際文化交流における文学——(『日本近代文学』76集、二〇〇七年五月)に詳しい。一九二二年、国際連盟の諮問機関として学芸協力国際委員会(Commission International de Cooperation Intellectuelle)が設置される。その委員会内で企画された「日本叢書」の第三巻として夏目漱石『ころろ』が選出される。仏訳 *le Pauvre cœur des hommes* は堀口大学・ジョルジュ・ボノー(Georges Bonneau)によって共訳され、学芸協力国際委員会から一九三六年六月刊行される。
- 6 アナトール・フランス(Anatole France)の主張は一八九八年、新聞ルタン(*le Temps*)誌に六月二三日、七月七日、九月八日の三回にわたって

「道徳と科学」(*La Morale et La Science*)として掲載された。一方ブルンティエール(Ferdinand Brunetiere)は同年の『両世界論』*La Revue des Deux Mond*誌に「弟子」(*Le Disciple*)を発表し反論した。

- 7 テーヌの理論をさらに推し進めたゾラの実験小説『テレーズ・ラカン』において夫殺しのテレーズとローランは自殺する。ゾラはその序文において、自由意志を奪われ、人間の獣性にひきずられる人物を描くと述べている。(エミール・ゾラ『ゾラ・セレクション』I 初期名作集』宮下志朗訳、藤原書店、二〇〇四年六月)

8 旧蔵書には一九〇一年の英訳本が所蔵されている。東北大学漱石文庫データベースに英国留学中購入図書リストの最後に購入記録がある。

- 9 「Paul Bouquet」の箇所は漱石の線引きが多い。
 - 10 ブールジエ『現代心理論集』平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版局、一九八七年十二月三四五頁
 - 11 W. Stephens (1908), *French Novelists of To-day*. London: J.Lane. p168
 - 12 ブールジエ『現代心理論集』平岡昇・伊藤なお訳、法政大学出版局、一九八七年十二月三四五頁
 - 13 Benjamin Constan. (1816), *Adolphe*. Treulliel et wirt. (バンジャマン・コンスタン『アドルフ』大塚幸男訳、岩波書店、一九三五年四月)
 - 14 Eugene Fromentin. (1863), *Dominique*. 出版社不明(ユジエヌ・フロマンタン『ドミニック』市原豊太訳、岩波書店、一九三七年十一月)
- (九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年)